東京圏における格差拡大の進行過程とその社会的帰結に関する研究

(5) 仕事の条件と首尾一貫感覚 SOC の階級的基

東北学院大学　片瀬一男

1　目的・背景

仕事がストレスを生むメカニズムについては、「仕事の要求度-コントロール・モデル（Karasek and Theorell 1990）などによって明らかにされてきたが、その一方で個人の「首尾一貫感覚（Sense of Coherence：以下、SOC)」がストレスを緩和するメカニズムも究明されてきた。この首尾一貫感覚について、アントノフスキー(Antonovsky 1987=2001:23)は、①把握可能感、②処理可能感、③有意味感からなるとみている。また、この SOC はカラセクらのいう仕事の条件から影響を受けて形成されることも明らかにされてきた。とくに、コントロールの高い条件下で仕事の要求度が高いことは、新たな職業スキルの学習を促進し、SOC を高めることが示唆された（片瀬 2014)。本研究では、この仕事のコントロールがマルクス（Marx 1678=1964）の労働過程論をもとに概念化されていることに注目し、SOC 形成の階級的基盤を仕事の条件になかに探ることを目的としている。

2　データと方法

分析には 2016 年に行われた「首都圏住民の仕事・生活と地域社会に関する調査」データを用い、SOC に関しては、SOC3-UTHSVer.1.2（山崎・戸ケ里 2017）によって測定し、仕事の条件は「要求度-コントロール」モデルの日本語版 JCQ（Kawakami et al　1995)をもとに把握した。

3　結果

まず、階級間で SOC を比較すると、資本家と旧中間階級で高く、新中間階級・労働者階級がこれに次ぎ、アンダークラスで低くなっている。アンダークラスでは、仕事のコントローの低さが抑うつを生むことを指摘してきたが（片瀬・浅川 2017)、アンダークラスの抑うつ傾向の高さはストレスに対する汎抵抗資源の欠如によるともいえる。

次に、SOC を従属変数として、階層的重回帰分析を行った。まず性別・年齢を統制した後、階級の効果をみたところ、新中間階級が有意な正の効果をもったのに対し、アンダークラスであることは有意に SOC を低下させていた。次に仕事のコントロールを追加すると、アンダークラスの負の効果は変わらなかったが、新中間階級の効果は消失した。したがって、新中間階級で SOC が高かったのは、仕事のコントロールの高さに媒介されるものであることが分かった。最後に要求度とコントロールの交互作用を入れると有意な効果を示した。仕事の要求度別にコントロールが SOC に及ぼす影響をみると、コントロールが高い条件で要求度が高いほど SOC も高くなることが示された。この仕事のコントロールも、SOC と同様、資本家階級でもっとも高く、アンダ―クラスでもっとも低い。ここでも生産手段の所有にもとづく労働過程の統制が仕事のコントロールの階級的基盤になっていることがうかがえる。

4　考察と結論

上記のことから、仕事のコントロールは労働過程への統制を意味しており、それが強いほど「労働過程からの疎外」も少なく、ストレスを緩和する汎抵抗資源の獲得も促進されることが考えられる。加えて、カラセクらも述べるように、仕事のコントロールが高い条件下で要求度が高いことは、ストレスを生むというより、新たなスキルの学習の機会ともなり、ストレス対処能力としての SOC を高めるといえる。この考え方はまたコーンら(Kohn. and .Slomczynski,1990)の「仕事の自己指令性」という概念にも通じる。なお、本研究では SOC が汎化されて社会意識に影響する（たとえば権威主義を弱めるなど）といった明確な傾向は検出できなかったものの、SOC の高さが他の社会生活の領域にも汎化され、地域集団への参加を促進することが明らかにされた。

[注]　図表・文献は当日、配布する。本研究は、科研費基盤研究(A)「大都市部における格差拡大の進行過程とその社会的帰結に関する計量的研究」(課題番号 15H01970　研究代表者：橋本健二)による成果の一部である。